

2023年5月7日 主日礼拝

説教題「あなたは、わたしに従いなさい」ヨハネ福音書 21 章 18～25 節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは言われた。『わたしが来るときまで彼が生きていることをわたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい』(ヨハネ21章22節)

ペトロはガリラヤ湖のほとりで主イエスと出会い、弟子としての歩みを始めました。その日以来、主イエスと共に歩んだ約三年間はペトロにとって輝きにあふれた宝物のような日々であったことでしょう。この世界は神さまが大切な独り子をお与えになるほどに愛されている世界であり、神さまに背を向けてどんなに遠く離れた一人のことも、神さまは諦めずに祈り続けてくださっていることを、ペトロは主イエスを通して知らされてきたのでした。38年間、病のために絶望の中に寝たきりだった者がその寝床を担いで歩き出し、生まれた時から目が見えず「お前は罪の中に生まれた！」とさげすまれていた者の目が見えるようになり、「ラザロよ、出てきなさい」という言葉によって「もう死臭を放っています」と墓の中に置かれていたラザロが生き返るのを目の当たりにして、ペトロは、この世界において神の愛から見捨てられている者は誰一人いないことをまざまざと体験してきたのでした。

この主イエスが教えてくださった神の国の愛に生きるとき、私たちの人生は変えられ、私たちお互いの関係も変えられていく。ペトロは主イエスと共に生きる希望に胸を躍らせて、すべてを後ろに置いて従ってきたのでした。

ただその輝きに満ちた日々が十字架によってまったく暗転してしまいます。イエス・キリストという神の光が、人間の抱える罪の暗闇に飲み込まれる現実の厳しさをペトロは突きつけられます。神の愛と希望が人間のどす黒い悪によってひねりつぶされる中で、ペトロは自分が持っていたはずの信仰がいかにか頼りなく、ちっぽけなものであるか。これだけ主イエスを愛して慕い、主イエスの教えくださった神の国の真実を信じてきたはずなのに、もみ殻のように風に吹き飛ばされる、情けない自分の信仰を思い知らされたのでした。

しかしそのように、人間の罪の暗闇に絶望し、自分自身の抱える弱さとずるさと闇に絶望し、これからをどう生きてよいのか分からなくなっていたペトロに、復活の主イエスは、一度、二度、三度と御自身の命をあらわされます。あの夜「三度」知らないと言ってしまった自分。「三度」どころではない、これからも同じ過ちを繰り返してしまおう自分。弟子と名乗る失格などまったくない自分。しかし、そのように自分のダメさをとことん知ったペトロだからこそ、「わたしの弟子として、わたしに従ってきなさい」と招いてくださる主イエスの深い愛にふれた時、ペトロの中に再び「この方の愛と共に歩ませていただこう」という信仰が吹き込まれたのでした。この時ペトロは知るのです。「一番弟子」と呼ばれてきた自分だけけれど、自分の信仰の強さ、主イエスへの愛の深さゆえの「一番弟子」ではない。主イエスに誰よりも赦され深く祈られている「一番弟子」の自分であることを。そ

して主イエスの十字架は「罪人の頭なる自分」のためであり、主イエスが語られたすべての言葉は、他の誰でもない「罪人の頭なる自分」に向けられた言葉であったことを知った時、ペトロの中に「十字架の主への信仰」が明確に示されていったことでしょう。ペトロは「あなたは自分の行きたくないところに連れていかれる」という言葉をもって、主イエスがそうであったように、主イエスに従う弟子もまた、この世界で神の御旨に従う者が受ける苦難への覚悟を求められたのでした。

そのようにヨハネ福音書の 21 章の「三度目の復活」の記事を読むとき、「ペトロよ、君ほど主イエスに愛されている弟子はいないね」と言いたくなります。十字架においてとことん砕かれたペトロを弟子として再び招くために、主イエスは「三度」ご自身をあらわし、「これからもペトロの生涯を通してずっと」御自身の慈しみをあらわし続ける約束を示してくださったのです。

ただ、そのペトロがどうしても気になって仕方ない弟子がいたようです。「主イエスの愛された弟子」です。この弟子はヨハネ福音書を著した弟子として名まえが伏せられているのですが、歴史的にはゼベダイの子ヤコブの兄弟ヨハネではないかと推測されてきました。この「主イエスの愛する弟子」は最後の晩餐の席で主イエスの胸元に寄りかかっていた弟子であり、主イエスの十字架の場面でも「これがあなたの母です」と母マリアを託されています。さらにマグダラのマリアから復活の知らせを受けたときにペトロと一緒に墓に出かけ、この三度目の復活でもペトロと一緒に漁に出ていて、岸边にたたずむ主イエスを指さして「主だ」と叫んでいます。この弟子は十字架の場面で怪しまれなかったことから、かなり若い少年だったのでないかと推測されたりもしています。面白いことに 20 章で主イエスの墓にペトロと二人で走り出した際、ペトロよりも足が速く途中で追い越すのですが、墓に着いても自分は墓の中に入らず、あとから到着したペトロを墓に招き入れています。年長者であり一番弟子のペトロに敬意をはらうこの行動からも「愛する弟子とは少年だったのでないか」という推測が成り立つのかもしれませんが。

そしてペトロは主イエスから自分が弟子として受ける苦難を示された時に、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と尋ねたのです。わたしはこのペトロの言葉を読みながら、改めてペトロは「独り」ではなく、他の弟子たちの「交わりの中」に生かされてきたのだなと感じました。ペトロはこの弟子が自分とはまったく異なった賜物で主イエスに仕え、主イエスから愛される姿を見て、どこか少し嫉妬を覚えながらも、主イエスに従う信仰を強められてきたのではないか。ペテロが気になって仕方ない他の弟子たちとの交わりを通して、ペトロの信仰が育まれたのではないかと想像するのです。私たちは「独り」では主イエスに従いえません。教会という交わり、多様なキャラクター、個性ある信仰の友との交わりの中に生かされる者であり、それらの信仰の友が主イエスとの関わりの中で「特別な取り扱い」を受けていく姿に励まされながら、「あなたは、わたしに従いなさい」という主イエスの招きを各々聞いていくのではないのでしょうか。信仰の友との交わり、その存在に励まされ歩むことができていることを感謝し、共に主に従っていきたいのです。